

假山記

「俺は殺されるかもしれない」橋の上に立つてみて、さう思った。堤防の上にはぐんにやりと首を垂れて、街燈が何本も立つてみた。遠くのものほど次第に小さくなって行く。倉庫がいくつも見えた。倉庫の屋根を越して、マンションの無数の窓がこちらに向けて開いてみた。川には材木が、まるい太い材木が互に針金で結ばれたまま浮んでみて、そこが木場に近いことを示してゐた。材木と材木のあひだの川の面は、流れるとも見えず、テラテラと鋼材のやうな色をして、時々白く光った。僕は山の中の流れの早い、すきとほつた水がしきりに恋しかつた。死はこんな時に、不意にやつて来るのかもしれない。橋の上をトラックが一台通つた。荷台は僕のすぐ脇をかすめるやうにして過ぎた。しばらくして幼い少女をつれた女が橋を渡つて行つた。僕に近づいた時、女は少女を引き立てるやうに手をひつぱつた。僕は空を見上げた。紅を帯びた雲が青い空の前にかくつか置かれてみて動く様子もなかつた。僕の立つてゐる場所は、相当遠くからも見通しのきく場所であつた。どこからもよく見えるはずだ。僕は無防備で立たされてゐる。マンションの一つの窓から機関銃の火が吹けば僕は倒れる。橋のたもとから人が銃を持って迫れば、僕には逃げ場がない。この空間のどこからでも僕を攻撃することが出来る。僕は危険を意識した。僕は何でもないふりをして橋の上で待つてゐた。その日は憂鬱な日であつた。夕刻近く彼から電話があつた。彼は僕の友人である。僕も彼にあひたかつた。自動車の運転手がいけないのだ。釣銭がないから、と言つて、僕を指定の場所の橋の上より相当先までつれて行つて、煙草屋の前につけた。煙草を買つてこまかいお金をつくることを強要した。気分はその時から崩れた。

「すぐいらつしやい。あなたの所からだ自動車に乗つて八号線を南下して、××駅に出て、信号を左折して、すぐ右折すると橋あります。橋を渡つてから左折してそのあたりで下りて、ブラブラして待つてみて下さい」

彼は電話でさう言つたのに、運転手は橋を直進した。左折すると煙草屋がないといふのだ。僕は友人がこんな場所に関連した生活があるとは思つてゐなかつた。不思議な気持ちで、煙草屋の赤電話で、聞いておいた電話番号のダイヤルを廻した。

「もうついたの。どれどれ。ああ、見える見える。やつぱり、橋の上までもどつて下さい。むかへに行きますから。橋から動かないでね」

僕の姿は彼に捕へられてゐるのか。このあたりにゐる限り、僕の姿は捕へられてゐるのか。彼はいつたいどこにゐるのだらう。しかも彼は電話にすぐ出た。彼はその電話を支配してゐる。僕は不安になつた。気分はガタガタに崩れた。橋の上までもどつた。彼は僕を支配してゐる。しかも、待つてゐても彼は来なかつた。どこから現はれるのか見当がつかなかつた。彼は実は敵であり、かねがね僕をねらつてゐたのかもしれない。銃撃をうける可能性がないとはいへない。

精神の動揺から、日常の何事でもないことの中に於て、僕はこんな風に死と結びつけて考へたりした。やがて現はれた彼は僕と握手した。その晩痛飲した。最後にはゲイをして彼は次の如く言はしめた。

「ねえ、旦那。また行きませうよ。ほんと。あたし、今度こそ、どこにでもお伴するし、どんなことでもいいわ」

その前に屋台の天ぷらを食べたのだが、天ぷらをあげてゐた二人の男は忘れられない。水

澁伝にでも出て来さうな、たくましい二人の男が着てゐたものは、なんと腕がまる出しになるやうにつくられた白い上つ張りであつた。男の腋の下の毛がまる見えだ。僕は思はず彼にささやいた。

「まさか、君、人肉を食はすんぢやないだらうな」

目を据ゑて、彼は両手を台につくと

「おい、板さんや」

と言つた。僕はぎよつとして、彼と二人の男と話をさせないやうにした。

その前に彼と僕は、さびれた料亭の、かびくさい座敷にゐた。橋の上で待ち合はせて、すぐそこに行つたのだが、雀色時とも申すべきか、なんとも情緒のある時刻であつた。床の間の現代風着色山水の愚劣さはともかく、なげしの上にかかつてゐたもう一枚の方の絵は、古ぼけてゐるだけに、面白かつた。白百合の花に蜂が頭をつつこみさうに飛んでゐて、白百合が、ほぼ茶色に変色してしまつてゐた。障子をあけて彼は言つた。水をまいたばかりか、つめたい風がかすかにただよつてゐた。

「庭をごらん下さい。今時、これだけの庭はなかなかありません」

十坪の庭としては、竹もあり、築山もあり、まとまつてゐた。僕は見てゐるうちに、さうか、さうか、と思つた。ぼうつと白つぼい顔の老女中が室に入つて来たが、影のうすさうな感じも、その場にふさはしいものと思へた。僕は竹のそよぎから、ひとつの情景を心に浮べてみたのだつた。やはり、竹がそよぎ、築山があり、老女がゐる。

もつこ一ぱいの、一尺の土もりではありますが
そびえ立つ華山の三峰そのものに思はれます
見てみると身は野にあるかといふかり
山深く 雲が湧くかと思はれます
竹は春のやうな葉かげをおとし
香炉からは立ちのぼり分れる暁のいきほひ
南山の寿 あなたの長寿をお祝ひ申しあげて
おめでたいかすみ が 日日たなびくやうです

さしづめ老女は、杜甫の祖父杜審言の後妻、苑陽太君盧氏にあたるといふわけである。そこに杜甫と南曹小司寇の舅が待つてゐる。我等がそれに当るといふのではない。庭前の竹と築山とが、あるひはかういふ具合のものではなかつたかと思つたといふことである。僕はこの詩には「假山」といふ題があつたものと思つてゐた。むしろ題につられてこの詩が好きであつた。ところが、さうではなくて、「天寶初、南曹小司寇舅、於我太夫人堂下、壘土爲山、一匱盈尺、以代彼朽木、承諸焚香瓷甌、甌甚安矣、旁植慈竹、蓋茲數峯、嶽岑嬋娟、宛有塵外數致、乃不知興之所至、而作是詩」(天寶の初め、南曹小司寇の舅が、わが太夫人の堂下に於て、土をつんで山をつくりました。もつこ一ぱいで一尺の高さのもの。これまでの木の台にかへて、磁器の香炉をのせるのです。香炉はすわりもよくのりました。そばに竹を植ゑました。峰のぞばだちも、険しく、竹もうつくしく、まるでこの世のものとも思へません。見てゐてあまり面白いのでこの詩をつくりました)といふ長い題であつたことを教へられた。盧氏は天寶三載五月六十九歳で亡くなる。この詩は天寶元年杜甫三十一歳の時につくら

れたらしい。そしてその年には、彼の命の恩人とも言ふべき万年県君を失つてゐる。それだけに南山の寿を思ふこと一入でもあつたであらう。杜甫の二十代は旅と狩猟に青春のエネルギーを費してゐた。一尺の假山によせて、杜甫はそれらの日々に現実に見た山々の、力強い姿を思つたことであらう。「假山」といふ題が好きであつたといふこと、それにつられてこの詩が好きであつたのだが、そこにはまた理由がある。

上野動物園の猿山のボスの話が新聞にのると、僕は特別熱心に記事を読む。猿山のボスはこの近年転変がはげしいらしい。しかし、僕は猿の勢力分野に興味があるといふのではない。あの猿山が、動物園の都合によつて破壊されることになつたり、動物園学の発達によつて、より機能的な別の猿山が造られるやうなことになつたらどうしようかといふ心配があるのだ。さうなつたら、動物園長か都知事に手紙を出すつもりである。

「拝啓 閣下におかせられましては益々御清栄の段お慶び申しあげます。突然のお便りいたします失礼万々お許し下さい。新聞紙上及びテレビ報道番組により知りましたが、今般上野動物園猿山廃止取壊しに決定いたしました由、残念至極に存じます。つきましては御不用になりたる猿山を小生に御払下げ下さるわけにはいきませんでせうか。記録にもあることと存じますが、実は該猿山の原型は小生の父、盆景家潭水が当時の東京市の依頼により作成したもので、小生にとっては父の記念ともなるもので、もしお払下げ賜はりますれば、永く大切に保存いたしたく存ずる次第でござります。顧りみますれば、昭和ひとけたの頃かとも存じます。父がある日多数の猿の姿態を模したる小さき人形を(猿の人形とはをかしくも存じますが)持つて帰宅いたし、かの猿山の原型になりました盆景の作成にかかりました。以来数月、徹夜の日もあり、苦心惨憺の末、たとへば、猿の生態の研究などを致す日もあり、やつと完成までこぎつけましたことを記憶するものでござります。もし小生の手許にお下し下されば、庭の假山ともいたし愛撫して保存いたす所存にござります」

かつて僕は杜甫の「秋興八首」猿の声の句を読んで、上野動物園の猿山を思ひ出した。生活上の苦難に面した場合、一人動物園におもむき、猿山の前で相当の時間をすごしたこともあつた。猿が口をあけて叫びをあげるのを聞いて、僕は、さうか、さうか、とうなづいたものである。「假山」の詩を思ひ出した時と同じやうに。

乱酔した彼は僕を国電の駅まで見送つてくれた。僕は国電に乗り、地下鉄の終電にまにあつた。地下鉄は上野に行かうと思へば上野にも行けた。彼は僕の懐中が自動車で深夜の帰宅を許すほど豊かでないことを知つてゐたらしい。且哀れんでもくれたのであらう。当夜の出費は彼に帰した。杜甫はあの詩をつくつた後、李白とめぐりあふ。安史の乱を経験する。以来彼の人生の悲劇は彼の詩に詳しい。考へてみると、杜甫は、弓形の日本列島の外側の距離に等しい距離の移動を果してゐる。一家を率ゐ、棧道を、また船中の旅。大河の上に数年をすごし、望みはなほ北に帰ることであつた。若年の日の詩篇を消してはゐても、千余の素晴らしい詩を残した。杜甫の体格は、きつとかの天ぷらの屋台の男に優ること数等であつた。皇室の縁者として忠節を支へる心強く、生涯変はることなかつた。杜甫は強者の側に属してゐた。大木のおもむきがあつた。

もし、僕の「假山」上野動物園の猿山が僕に払ひ下げられることになつたらどうであらうか。どこに置くのか。残念ながら僕は猿山を置く庭を持たない。はかない望みの心ばかり。せめて、一度だけ、月夜の晩、猿山を愛撫するか。あの左側の方の峯によぢ登つて、頂上で、口をあけて叫んでみることをしてみるか。これらすべて夢まぼろし。僕は友人である彼

に殺されることもなく、奇妙な半夜をすごすことが出来た。精神の動揺は、それなりにいつまでもゆれつづけた。これら、みな、「假山」の話としておくのがよいのではなからうか。振幅ははげしいほどよろしい。「一匱功盈尺 三峯意出羣 望中疑在野 幽處欲生雲 慈竹春陰覆 香爐曉勢分 惟南將獻壽 佳氣日氣氲」